

近世文学と地誌

提出者 真島 望

〔論文の内容の要旨〕

本論文は、従来多く実用書として享受されてきた近世の地誌を、本格的に文学史の中に取り込むための基礎作業として企図されたものであり、近世地誌論の新たな序説とも言い得る。その内容は左のごとく序論と結論を配した全十章で構成されており、目次に続けて各章の要約を記す。

序論

- 一 問題の所在と先行研究
- 二 地誌はなぜ文学なのか
- 三 近世文芸との接点
- 四 本論の構成と意義

第一章 幕儒の学問と地誌(一) —幕府御大工頭鈴木長頼の文事—

- 一 閱歴
- 二 諸家との交流
- 三 編著の特色と背景
- 四 小括

第二章 幕儒の学問と地誌(二) —『豆州熱海地志』の成立と展開—

- 一 鈴木秋峰『豆州熱海地志』について
- 二 『熱海地志』の生成
- 三 後続作への影響
- 四 小括

第三章 地誌作者菊岡沾涼 俳諧からの出発(一) —俳諧活動の実態—

- 一 俳諧活動を中心とした事績(年譜)
- 二 考察—俳壇での孤立の実態—
- 三 小括

第四章 地誌作者菊岡沾涼 俳諧からの出発(二) —享保絵俳書の成立—

- 一 その形態
- 二 その特色
- 三 先行絵俳書との比較
- 四 露月絵俳書への影響
- 五 小括

第五章 地誌作者菊岡沾涼

俳諧からの出発(三) — 俳諧系譜『綾錦』の盛行 —

一 諸本

二 楠堂文庫蔵写本について

三 小括

第六章 地誌作者菊岡沾涼

地誌・説話編纂の方法(一)

— 『諸国里人談』・『本朝俗諺志』とその系譜 —

一 先行研究

二 その概要と特徴

三 編纂の実態

四 地方との接点

五 後続作への影響

六 小括

第七章 地誌作者菊岡沾涼

地誌・説話編纂の方法(二) — 自筆稿本『熱海志』について —

一 近世の熱海

二 『熱海志』について

三 『熱海志』の特色

四 生成の実態

五 自作への流用とその影響

六 小括

七 翻刻

第八章 江戸名物と享保俳諧

— 絵俳書『名物鹿子』について —

一 資料の概要

二 享保以前の江戸名物

三 『名物鹿子』の特徴

四 編纂の背景

五 その影響

六 小括

第九章 化政期の江戸名所と俳諧

— 万賀編『風流江戸雑話懷反古』を中心に —

一 資料紹介（『風流江戸雑話懷反古』）特色

二 内容と特色

三 成立の背景 — 地誌と俳諧の接点 —

四 小括

第十章 再生される地誌

— 『東国名勝志』とその依拠資料をめぐって —

一 『東国名勝志』の概要

二 依拠資料

三 受容態度と「東国」認識

四 『東国名勝志』とその時代

五 その影響

六 小括

結論 総括と今後の展望

序論。近世期の地誌に関する先行研究を整理した上で、それを文学として捉えうる可能性を提示し、詩歌や抒情的記述といった側面を意識的に捨象して実質を重視した近代地誌との比較により、広義の「文学」作品に包含されうるであろうという見通しを述べる。また、近世期文芸作品上での地誌の利用や、逆に地誌に擬えた文芸作品の事例を列挙・検証した上で、特に十八世紀以後開花する江戸文芸の趣向立てに、地誌がいわゆる類書なみに大きく投影していることを確認。それらを前提として、本論文で対象とするのが元禄・享保期前後の民撰地誌であること、また中でも地方とのネットワークをもち、巷間の下情にも通じた俳諧師が多く地誌を手掛けていたことから、かれらの俳書や説話集の編纂態度にも注目する意義を述べる。

第一章。従来まったく光が当てられなかった、元禄期の幕臣文人鈴木長頼（号秋峰・御大工頭・五百石 一六五五～一七〇五）の著作活動と、かれの属した学問的交遊圏を描く。そして地誌作者でもある長頼の、和漢雅俗に渉る文学を介した幅広い交友と、広汎な知識の背景には、師たる人見竹洞をはじめとする、幕府の儒家林家門人たちの文事の世界が厳然と存在したことを確認する。長頼の著作には大陸や朝鮮など海外への強い関心が見られるが、それは彼我の対比よりも共通点を摘出しようとする、初期林家の学問に共通した所謂「和漢一轍」志向に由来するものであった。

第二章。鈴木長頼による熱海の地誌『豆州熱海地志』（一七〇〇刊）が、人見竹洞の漢文の紀行文を利用しながら独自に構成されていることを例示し、さらには後世の様々な熱海地誌類に、長頼の記述が応用されていることを指摘。江戸前期林家周辺の知識の集積が、幕末・明治まで影響した事実、官学の成果が長頼のような人物の活動によって民間へ波及した様相などが明らかにされている。

第三章。第七章は、江戸中期の地誌作者として名高い菊岡沾涼についての論考である。

第三章。近世後期の『江戸名所図会』出現まで、江戸地誌の雄として受容された『江戸砂子』の作者菊岡沾涼（一六八〇～一七四七）の、本来の活動である俳諧師としての事跡を考証年譜形式で記述し、これまで名のみ知られていながら、ほとんど明らかにならなかった沾涼の伝記的事実を発掘かつ修正し、さらには俳壇での孤立の実態や、同郷の芭蕉と蕉風俳諧への傾倒を確認した。

第四章。沾涼の著作活動の初期を飾る、絵入り俳書三部作について詳細に検討し、絵師・句作者・題材などから、江戸という土地を寿ぐ姿勢、すなわち後年の「江戸じまん」の萌芽が見えることを指摘した。また、近世の絵俳書史における沾涼編著の位置付けを行い、この後陸續と出版される露月の絵入り俳書の様式の、明らかな先駆となっていることを立証する。

第五章。沾涼が江戸俳壇の歴史を俯瞰・整理した享保期の俳諧系譜『綾錦』（一七三三刊）の版本研究

である。初印本（残念ながら欠本あり）と、さらに書物問屋行司役らの回覧用とおもわれる稿本の存在を報告し、それらを起点として、改刻や版權移譲の形態などをつぶさに追跡したうえで、異版・後刷りも多い諸版の先後関係を割り出し、本書の成立事情や流布の実態を想定した。そして前章とあわせて沾涼の卓越した企画・編集能力が、地誌・説話集編纂にも通ずる性格であったことを指摘する。

第六章。沾涼の編集になる二つの諸国説話集『諸国里人談』（一七四三刊）、『本朝俗諺志』（一七四七刊）を分析する。各説話の場所や時期などに正確を期そうとする態度や、同時期の説話奇談集に付随していた教訓性が大きく後退している、といった特徴を持つことに注目、さらには自作の紀行文や地誌にも転用されている様を示し、客観性を帯び始めたこれらの記述の姿勢もまた、地誌に通ずる要素であったことを指摘した。また、こうした編纂態度が、享保期、將軍徳川吉宗が進めた全国の殖産興業とそれに伴って編纂された科学的な実用書類のもつ傾向と軌を一にしているところから、享保改革の、民間における発現の一例とも解されることを述べる。

第七章。説話集『里人談』・『俗諺志』に窺えるような、沾涼の時間空間への固執が最も発揮された地誌『熱海志』について、その自筆稿本を紹介して検討を加える。江戸後期の故実考証家として名高い喜多村信節が珍重し、沾涼の後裔によって秘蔵されていたと思われるこの稿本は、沾涼が熱海を訪れた際に筆をとったもので、当時刊行されなかった書物ではあるものの、実地検分による地誌執筆の実態を窺わせる資料として比類ない価値を有する。先行する熱海地誌や後続作品との比較によって、その独自性を明らかにするとともに、詳細な書誌と本文の翻刻を付載した。

第八章。沾涼と同門の江戸座俳諧師露月による絵俳書『名物鹿子』（一七三三刊）を分析し、江戸名物を類聚するという、その後の流行に影響した点を考察。併せて土地のアイデンティティを象徴する新旧の「名物」の列举が俳諧師によって編纂された意味を考えた。このように土地のあらゆる名物を網羅列举しようとする気運は、享保期に急成長を遂げた都市江戸を如実に示すものであり、それらを描くに当代性を重んずる俳諧が、もつともふさわしい表現のスタイルだったことも指摘する。

第九章。あえて時代を下り、化政期（十九世紀初）の俳諧師の手になる江戸の地誌・説話集『風流江戸雑話懷反古』（写本）を紹介する。江戸地誌がその記事中に包含してきた土地の説話の、いわばもつとも拡大成長した形としてこの作品を扱い、江戸中の各地域から生まれた伝説・逸話の整理・概観を行った。こうした後代資料から遡及した分析によって、江戸中期における地誌編纂の性格をより鮮明にしえたとともに、芭蕉顕彰運動や、それによる名所の新出など、俳諧と地誌の関係の新たな展開のしかたにも言及し、書物が名所名物の発起の媒体となり始めたことも観察する。

第十章。やや時代が前後するが、舞台を江戸中期の大坂に移し、書肆吉文字屋市兵衛が刊行した地誌の改題・再編作業の様相を追った。具体的には鳥飼酔雅作『東国名勝志』（一七六二刊）が、西鶴の日本地誌『一目玉鉾』や遠近道印の『東海道分間絵図』など、元禄期の刊行物を利用して作られたことを立証する。吉文字屋は沾涼と彼の著作に着目し、沾涼作品の求板や類似書の刊行も行っていて、こうした版元の活動が、三都を越えた民撰地誌間の受容・利用・循環を促したことも指摘する。

結論。本論文で考察した内容をまとめ、さらなる今後の課題と展望を示す。

〔論文審査の結果の要旨〕

論文の隅々にまで行きわたった資料の博搜ぶりと各文献に対する緻密な考証・分析の手際は、それ自体の迫力もさることながら、そこから抽出される意味付けが、従来の文学史を書き換えるに十分な内容を備えており、説得力がある。とくに菊岡沾涼のごとき、当時は高名でも現代では全く忘れられた文人たちの没年を確定するのに、捨てられた墓碑のよすがとして近代の掃苔家による拓本の原物までも調査対象に入れていることや、幕末まで異版の多かった『綾錦』の諸版研究のために、出版申請用の写本を導入するなどといった手法には、世にある人物研究、版本研究のレヴェルを越えた、一次資料への執着、選択眼が光っていて、安心してその記述に身をゆだねることができた。

もともと精密で時間をかけた考証であるがゆえに、たとえば沾涼研究でいえば、その主著たる地誌『江戸砂子』に、本格的にメスが入れられざるままに終わっていたり、我が国の事物の起源を集めた『本朝世事談綺』への考察が手薄になっていたといった憾みはある。しかし、沾涼作品の本丸ともいふべきそれらの大部な著述に攻め入るための外堀は、本論文で十分に埋められたのであるから、今後それらは時間をかけた筆者のライフワークとして考究せらるべし、というのが審査員各員の意見であった。序論では、これらの地誌をいわゆる〈文学〉の範疇に入れることを提唱している。そうしたマクロな問題提起の姿勢は壮とするものの、それならばその場合の〈文学〉とは、近代流の古い概念でしかないではないかという疑問も審査員から出され、むしろこれが文学か文学でないかという問題設定自体を取りはらい、近世期ではこれも文学であった、あるいは文学を盛る器であったという大前提で論じていったほうが、古い近代的文学観の呪縛から自由になれるのではないかという助言もあった。また同じく序論において、自らの研究対象の絞り込みを意味付けているのはいいとしても、古代の『風土記』以来官撰地誌類の延長上に、江戸中期の俗流の民撰地誌群をどう置くべきか、また中々後期の幕府や諸藩で作られた官撰地誌に影響したと思われる、『大明一統志』をはじめとする明・清地誌からの影響をどこまで射程に入れるべきか、あるいは刊本写本取り混せて多く残る紀行文の記述と地誌との比較はどうか、そうした大局的な見通しが不足していたことへの反省も促された。

もともとそれらは望蜀の感ともいうべく、本論文によってはじめて明らかにされた江戸中期の文化的事象は多く、各章の内容が口頭発表された際の学会（俳文学会、日本近世文学会など）での高評価も思い起こされる。特に享保期俳諧に大きく切り込んだ沾涼や絵俳書の研究は、まさにそれ自体が新しい視点での俳諧史、文学史として考えてもよいのではないかという感想が審査員から漏らされた。筆者はあくまで地誌研究の前提として俳諧に光をあてたに過ぎないのだが、たしかに芭蕉や蕉門一辺倒であった従来の俳諧研究への自づからなる警鐘にはなっており、今後の学界への影響も期待される。また、享保の出版条例直後に作られたと思われる『綾錦』の書物行司回覧用の写本の発見や、絵俳書公刊における彫り師の編集面での参画、大坂吉文字屋市兵衛の地誌編集の手法など、出版史研究にも一石を投ずる指摘が論文の各所にちりばめられていて、これらも今後の学界の反応に俟ちたいところである。

以上の所見から、本論文が博士の称号に十分値することを、審査員三名の一致した評価とした。